嵐山
碇潜
雲雀山
藤栄
雷電

九

あらし山

次 芳野乃花の種とりし〱嵐山
にいそがん
抑是ハ當今に仕へ
奉る臣下也扨も和州よし野乃千本
乃桜ハ異国にもきこえたる名花なれ
ばさりとも芳野ハ万十里の外なれバ花見の御
幸叶ひ給ハざるによりて手もとの桜

さてあらし山ようつし植ゑられし所
れバ雲乃花を見て参れとの宣旨を蒙
り唯今嵐山へと急ぎ候　都
のしるき山桜千本の種ハそれぞと
て尋ねて今ぞみよし野の花の雲かと
詠めやる其方人の名残りと嵐山も
にまきしハおもしるの詠め妙なるらき

しほれしく　詞　急ぎ候程に是ハはや嵐
嵐山に着きて候　心静かに花を詠
めうずるにて候　花守ハ山や嵐
乃山桜雲もちらぬ梢かな
にほへる桜や雲も久方の
この所は　浅からぬ山の名残
ぢ遠みよのみて候ハゞ千歳万十

里乃翁なれバ花見乃時節あるきまするよ
げにたぐひなき山桜千本の花盛
移しうゑて此嵐山よりうつせし芳野乃
世途の例ごとや是とて君のめぐみ
の那きにそのまゝやつれぬぎ山高き
御代乃春の空ハおさまるまゝや
九重春めく門外よりも花車なるらん

きくも西よりの日の影ゆく雲のかゝる
山風戸無瀬に落る滝の波をもちらすと
きゆる花の滝波を返さぬ気色かな

平付

不思議や是なる老人を見れバ花に
向ひ渇仰の気色見えたりけるハいかに
ある人やらん

ヱテ付

これハ此嵐山の花
守なりさて嵐山の千本の桜ハ芳野

木なれば猶よ花に向ひ渇仰申候
ことしあらし山乃千本乃桜乃神木
なるへき謂いつたに　実御不審は
理りなれどもよし野の千本の桜を
うつされしきやへみよ人てゐしね
折くなこもり勝手めうさきにこの
花よ影向するものと　実やあり［illegible］

いとゞ名乃嵐山あらはさの花乃
名所をも見ず行きてはるめ貴きぞ
ことし社様も神慮あればなにか花
乃色おかをもあらはれしその御恵ミ
実さ毛の毛しや　みやき山おろし治まる
みよし野乃神風あらくもの所ら
名こそあらしの山ありとも　花なよ

そちゝじ風にも吹つゞくこともなかりとて
だ婦乃神も我そうし音たへやかの
風し山々をまもらせ給ひそ
此岩屋乃松風が實相の花盛
開くる法の色をそへし嵐の山
おく霞栄橋乃水清く吉野山
月のさめる世に濁さぬかゝろあまた

ても流れし大井川の水上へよとをつさ
いしだに伴さ花をとをふよくたる
乃風ハ吹みちて庭前乃木
をさそふとも神風や吹さハ妄乱
乃雲も晴ぬつ千本の山桜長閑
きあらし此山風ハ吹とも枝ハ鳴らさじ
日も既に暮れ行くのよのまなまる世経

ゆふづく日をみよしの山櫻さくら
雲にうつりて夕陽殘る西山やみ
きすゝけふゆきさけしく吉
野のくさきの花の種を植て
嵐山にうつしたまふ神あそびこそ目出
度て乃神樹百そめてたえに多き
咲く花社ましまさる雲乃

てもりかけみどりさすや松の色
青根が峯寛くおぐら山をもみえ
きりむすぶ落樹乃風下は大ゐの
岩根は波のよる亀山をみてたぐひ萬
代とぞくやかやもとく神あそびちはやや
ふる神樂乃鼓音澄くぞ庭
綾の袂をひるがへし舞も樂の拍

豊に度重かさく感應所を見いたらは
里かゝる不思議や南の方より吹くる
風の異香薫して瑞雲たなひき
金色光をかゝやかされは蔵王
権現の示現かや利生利物の法
まちのく秘本覚の都を出て分
段同居の塵にまじり金胎両

部の一足をひつさけ悪業衆生
の菩提をたすけを行くよ虚空に
御手綱あらくは忽苦海の煩悩
をきらひ悪魔降伏の正蓮たま
おしまに光明を放つゝく國土をて
尽く衆生を守らせひとあらうし
てましまして蔵王権現同躰異名

かをかはせをみなどのくだ
りの山よりもひらきたれば
是精よりも門前ゞが家をへ
乃峯がきりを運く手むけ櫻く
芸けうゆく書くさえしてき

嵐山 七終

碇潜

次第
雲と志るへ乃舟よりでゞ月の
行衛を尋ん 是ハ都方より出る
僧にて候 扨も平家乃一門ハ長門乃
浦にて果給ひて候 我も平家の御
身のゆかりにて一門乃御跡を弔ハ
ばやと思ひ候ひ只今長門乃国へと急候

碇潜

本よりも浮世の外に出でゝ
宿りも定めなく捨人の行方も定めず
まよひてこゝとも波に漂ふ塩の瀬
さすらひの浦に着きはきうく急げば
猶よるべなき浦に着きて留舟を
御侍便船を乞ひ申さばやと思ひ候ふ
あれなる舟に申さんや八郎為朝の其傳

に沖も渚も波は荒れてしまゝ
をりやうやう出でうき世の中を渡
急ぐとよ磯千鳥友よぶ声
まさし海士の子なれども心は殊に寄つく
あまの小舟に便船や申さん　中く
のり乗じ候へ捌舟賃は　さん候
出家の身なれば舟賃はなし

門司赤間や波風の立もやらじとて
おろしさすを 舟渠ありて渡しを
とハ云道心ある僧達かな 不思議の
のせ給ふが家の僧よ舟渠とぞ
らんと思ふ人こそ道心とハ
云へきれ 宮こ暮ハ程の物よらひ
なりけるよハいかなる有やらん 是ハ

一宗妙典ありがたさあらハ讃誦さん
物ハ焼しやには僧の讃誦を聞舟渠
取らく 今此舟に法の力ら いざ聴
聞せん法花経の題目の戸あ
る勢やうり次 妙法蓮華経菜
王菩薩品如子得母如渡得船 二六
渡りに舟を得たりとやあらたふとや

此御法 とく〱白きん〱どうも
頼ひをかけし舟にのる人の御法にこそ
結縁と云へり嬉しやありがたの
ちかひの舟に法の人仏生の縁は有
うきや〱いろふせう成先し舟に
里に有る人もとふへき事のあるにし
何とやらん似合ねかちらくれへ丸

びよう〱此浦にてのいくさの有様
安き間の事語つて見せ申さん
抑此壇の浦の合戦ハかうと
夫へ時門楯の沖男能登守教
経小船に乗り大長刀持てこゝかしこに
乗移り〱ことをあまりこすそ共
ちかひ奴ろひよそりけ時新中納言

使者をたてゝ降参申さは能登殿の振
廻しけれはさやうとてよきに敵よせてもあ
らはこそとてさらひきれは梅の汀
あだ大将とておとらす乗うつりや右
らんとらく敵の舟に乗うつりけり
九郎判官をと舟に乗る 男ハ いつくへ乗すり
きん判官の舟によりうつりきね

能登殿より使をひらいてうら判
官をと心ざしてかけたれとも見
きん長刀揃よういきさんて二丈ほと
うりの味方の舟にうつりとひ
のきゝ教経はせんかたなくや長刀
あけさらくまうて生つりあまり
をとらりてさつ乗あとり

きる所に安藝の太郎同じき
次郎兄弟二そうの舟をおしよせ
能登殿とそうてうちひきる事かたし
あのまさらに太刀をもしつかう
やいざやめいどの供につれんと左右
れうわきをけしからずかいはさみ
て引よせてたゞ右の脇にはさみ

てあこの底にしづみけり梅社
人々春の夜の夢と消えて白波のあと
さひてとひのうへあまき際さびしく
ひのうへ梅をまれ花も声のみ夜
折節は海上ひとりのみかう
平家の船ども所に思ひかれ
こゝにいざなうし大やうひ出て

四九
さもさやとらの海辺にも九流も
ゆふなきもきしは露湯の江のなか
とりあへす琵琶をしらへつゝ
こんなる秘曲松風にも岩に寄る
なを更にまさりぬ琵琶のしらへ
恐ぬるきよの事かな いろよ大納言
の同じ月よもこ宵は波も静なる夜

月を詠じあかしの浦の事なりあ
お音これとの琵琶 梶枕さあらくは
月を雲風のうつく吹きようなや音
とりて夜半に月を海上によ
亀 まろんを観ずる時はさかんなる土やう風葉
命を申さハ江の途りまつへきる舟
廿 去猶よみかみの浦風の琵琶んを今ハおきて

さありしかハ新中納言知盛二位殿
にむかひ宣ふやうハ是までと候ぞ御
痛ハしやあらはれ行幸を浪の底に
くまゐらせ一門ちりぢりと沈
をおさへて宣へ大二位殿ハさき
ろばゐて行ハそれくと立さ
まひ袴うへの衣をとしをりしく白き

はかまのはもまたしかをとて志け
をと搦ミまさこはりうちと搔ミまう
大納言のつぼねの内侍可とって
う族皇居をしまりまゐらせきこふ
そうもんやへ引に国とやな迎
おほさ可しやへる波の底竜
宮とかやて目出度都の外の行幸

さあらんとおぼしめしそうし給へ
とゐかく思ひしきつかに
龍顔に御涙をうかべさせ給ひて
東にむかはせ給ひて天照太神
に御いとま申させ給ひ其後西方に
て御十念もおはりぬに二位殿あ
こより身をいさぎよくせんとき

て波の底に入ぬれどめぐりしを
とてもよしなき我身よしなや蹤帛へや
僧達と戸をとりてきのとし
御供にこのこそとりこく附き
聞きあるも目も修羅の合戦の
ちとまるこそ波のようひしを
まい行去ぞ修羅の大將を

やだ意をのくしよ水面下水面寧相
三位殿乃義人ぞ川ちん百度へそ
をつきあまし追ちへぞ又修羅雲
ちんのうおちるそとしよ根めしや
修羅乃こうひちまれいく深
氏乃軍無其うひて修は刻毎
ど中ふ年ちゆんせめたらふうちあれ

うらし平家乃公達ともへふまゐり。
平家乃公達とりへふ並浪乃矢さきき
を横切さきとあへてら飛くる
うきき御侍りけうりぞ伊ふも知をり
まくえもちぐ大長刀とぞくさきあるふ
えのへだとあきてはなりてちくひ
ざりくの歟をあろはしきるうぞ今い

是までなりとてよろひ二領を
うちきし二ちやうの碇を是をかたく
あさんとももりもちるなる沖の碇の大綱
えいやえいやと引上て甲の上に碇
をいたゞきぴうりをいふきうく海
底にとんで入にける

雲雀山

男
抑是に候者は奈良の都横萩の右
大臣豊成公に仕へ申者にて候扨も姫
君を一人御持ありしを人の讒奏により
大和紀伊の国の境なる雲雀山にてう
しなひ申せとの御事なれども痛はしくこれ迄
御供申て人めをしのびて養ひ申て候

なふ深乃庵ともいとゞ奇角痛りけり
候去程に侍従と申乳母ばかりは在しの
花を手折秋草に花を売りて里に
出住家乃人に見せて代なし彼姫君
をはごくみ申候に侍従とよひ出し
里へ下さいりやとぞんじ候にいかさま
（与）何とまてはなそ　（男）けふも又里へも出ぬ人
（与）けふハ姫君に御暇を申へし　（男）やうて
御暇を申里へ出候へ（シテ）いかに申さ
事乃たきに里へ出て振売りなり
（姫サシ）宿やんごとなき　煙立て春の日いとく
くらしかねては　薪室に燭きて秋の
夜を明かし家貧にしては親知すく
なく賤しき身には故人うとかりし

きはまりもうとくおはしませ　貴人を
いらくらみへ今いやさわこたりせられ
皆ぐくかはらじ社れ山ふかきさら
も心のあるをもさそふ道世に尤理
まし草露のまろねのおきまく
もくて煙をたえくの(ば)かり悲
うきをもうちさしまし大悲の情を頼ま

むと草の戸ぼそを引かへて玉の里へ社
出つきたれく日にそく山嶺の雲霧
山ぐくおつるや露路成らん

ワキ詞　これハ

横萩の右大臣豊成とは我子也

立衆　これ

狩場の四季の遊びにも時折節の興
とまりはあつされまの三十三らればく
霞む外山の桜狩りも雨は降りきぬおなじ

くれぬるとても花の木陰にやどらん
桜よ月よあそぶ戯れと雪よりあくまで
かくれさえしやよろく天の月
雁の声しるかれぐ
ひとつも待花
の香むかしの雲ゆかりむすびし人の袖
の香をもそれぞとや昔を忍ぶ君がため故
ある草をあつめし常世の国よりぞ

そうじ我も王氏にて為よ参ある花を
手折つつ袂をかざしよむと心にかかる露の身を
残しやまちあさと思ひかまぞろく乃代をまえ
てぞ卯の花の杜若
むらさき
かける山草の紫の雲こめて花百代へ
月ふ花の月よりみえておぼろへてうぐす
き世ずが思ひながらけもきいりうれし森の末の

草咲ときは花ちりかゝりちら〳〵すうよ
日比鳴く侍日ハきうし時鳥おほひはを
こゑらく寿くおきて花擣やめさおく

トモ いつて寿申へき事なれハ其花を取行
乃為に持行てゆそ

シテ さらハ是ハ
哉あら人よしおもきし為に物らく行き
まてもはへ又青よめくてめされゆへ

花檻前よえんで色いまいかのし鳥林下に
鳴くあんたつきかして常にあらねかな
花乃顔又ちれやく花ちすみハづ匂ましぬ
かゆもかうミ草ばかりよ坊よ下手しろ今らよ

トモ 今又面白き賣物ハ依て花を賣ありへ
あらく渭乃音やらん

シテ 荒むくりしを
寿あるやめされまくハおつろそそよ

身をしるべくハ心ある露も枝に霜
おきてもくるしや常盤なきしやそむら花
乃月おもひ李乃戯にのみなる
何事もつらき事ハなくさきしかるへき
きらやいのちをも世の草木もなひやく
あさもよひ紀乃関守かたつか弓
ゆきつゝかへるさいつれなくもしまは

世やおしなべて花ならぬあらし花も去
人とや花見ぬ人そなかりき
洗花を買ふとのみへしよきかたにれたかな
と誘ひつゝ都の物語人へ
花を見捨ててゆく雁へ
花なき里に住みやならへるとも心なきかな
たゞひとつの数々あやまりなく花を惜しむ

乃風にほころびて蝶躍ハ花遊乃人
の折をえたるとたはふれ戯る花乃中胡
蝶舞あそび花香にめでゝうきたつ色
こゝろ乃花あるをや　然るにわれは
優花乃友春乃心や惜しむ人
さくら色にそめし袂乃ちきりハ哀この
へうさびしみよる有きもあきまし乃そらい

もよほされ蘭つる柱若つゆに哀なるくれ
面影のこるかひよ鳥乃跡ならぬ
遊子も又ようきつのるれさよ弱くてそ
花にめで鳥にうらやむ心ろ思ひ
乃露をしみ立るなれけ志乃花哀野
をも山よ出まとともしありしに人なき志う
むかしかはらにあまとをよまひとやなか

取られぬさおみてを別しまくに
ていつも今といつはたちさいつや
ごのらく柏乃二本ありてぞわれしかくにも
古人の命めよ成らいつきや高間
の山また嶺つきは家よ紀の路のさいらひ
あまた宮葛山よ隠居し敷乃あられ
かくもめぐらをお寺さ谷蔭の鶯のなまくき

ますらねおわ家よち乃雨ようつれてよく
てらきさえやらね御身の果それでそ
ますさせらくてもまた書返とのたれ
きをしらぬ山中にあられらあくもがみ
て鳥乃雲雀山よや偽様のらんさいさや
はらんく　やあいらにあをとい乳母の
侍従よてはあまたの豊成をかくしとてけ

あらはれ中将姫より　さる人の讒奏によ
りて　かく思し召し　御憤り深き由にて　此梅
それ叶ひの誠や　たとへひらけて
此ひばり山の谷陰に柴の庵を結び
隠し置き申して候へば　此の事　露見叶ふまじ
ず　今日もまた　社　梅つと持へ
姫はいかなる人にも見せ候へ

思ふはいかならぬ　おほしぬ　あはれ人の　かなしきをきゝ
つかひありて　我らが伝へ　中将姫の御行
まことの世にましまさば　いかなるあらん
かりそめも　今の村　才の孝の
者なりしに　我姫君の　かくまで浮き身
なり行く事も寿なりける　聞くにこそ
世にありとも　親悔ゆる父の

こゝろ深乃文字をも月乃ゆめしめ給へやあ
里ことはてよ　海を左右様に覚え
めんゝ中く法天乃神をしるり
照覧あるべきなり　かりいこそあらん
津しむあきしとぞこ乃志らぬ雲雀山乃
草木もともに谷陰乃ほかもなき道
こゝあしはれ山ふところ乃ほら木

にかゞみてもとひ草を分て罝鳥の袖を
扇よ親と子乃なかをもちぎりあひあへり
らずぞうひよ乃乳みきして只泣のみにこそ
うれしきや母をわかれあかさはさら袖
なまじひなるなさぬなかはやさしくと
あかしかれ乳母乃立てさ興
みのきしまらせてわ性ひれぬるさへあら

乃都の八重桜けふ九重の道をめでた
きさかへつるみちぞ目出度き

藤栄

行方定めぬ道なれば〳〵こしかた
も行くならまし　是は諸国一
見乃僧にて候我いまだ西国を見
ず候ほどに此度思ひ立ち西国行脚
と志て候　城南乃離宮に趣きて
もとめ行山崎や関戸乃宿は名のみ

見してぞ有りし果ぬ恨なるらん
ぞさすらひも変る世の塵の浮世
のあるらいづくの小篠てかるらく
下ゟ ウ 月も宿かるこやの池水底きよくすむ
足あれて 上ゟ ウ 蘆葉わきの風の
をとづくぎうしとおもはよ憂事は
捨る身としても有馬山かくれかねたる世
の中なりけりさこそあるらん身はさゞ
れ枕よりかね書ことさゞ鶏波立よする
あらし芦やの里ならひよそろしく
つきれ侘ほとよおもひしやの里につこは
て彼日の夕暮に山路より宿をかりくれ
やど思ひ侘びいたに見え候塩屋の内へ
案内申候
男 「誰にて渡り候ぞ

ワキ「諸国一見の僧にて候、一よの宿を
かし給へ　男「安き程の事にて候へ共
御覧候ごとく見苦しく候ほどにお宿は叶
ひ候まじ　ワキ「見苦しきは苦しからず
其道に入菩提の修行者にて
候、一夜をあかさせて給り候へ
男上ゲ哥「さらばお宿をまいらせんと柴の戸の

床の塵うち払ひ　上同「さゝぬの苔席をさ
只に松風や浮世の夢とさそふ覧
むぐらの門の世の情なるや雨にうち
とは宿の一樹の陰と覚したりく
ワキ詞「此御志ありがたう候へども互成
あさましき人ながら宿をかしてたべ
たうばこそ息のまゝにはそろ　男「いや名乗

あまた人なくは　ワキ〽いかに修行者たち人
とも候はゞ修行の者をしゆらへ
きよふさらに御出家へ　男〽何とて
候ふ中へきびしきは男やみえ地頭
藤左衛門殿の子息なく候ひ(し)が
ワキ〽扨はかきは行とうかれよ賤き海
士の中にことに成候ふくはず

男〽おそれながら藤栄殿に跡を押領さ
れ がれ様に思儀ある所にて入候
ワキ〽言語道断の次第なり儀を重
ねてはさりともなり　男〽思ひ寄も是にな
ワキ〽それ御見をなく　男〽いやくましく
さのみなく候へはよいとなくみては　ワキ〽そ
みかみんかてやうくみしてかう

まちあらう　男「さらハ御急き候へ
ほどもなうて御目に急ぎて　ワキ「何と
芦屋の庄七百余町の所を一男月若
に譲られしを叔父の藤太夫に
封いをして判やり何とかかれ根のせ
うきたれたゝしさハあてにわれひとり
御前沼ハはなねそ　男「いまだ見ゆる

運のつきぬ所に西明寺殿とて修行
に出させ給ふ由承り候間何とぞ御前まゐらん
ワキ「あら痛はしや候ども此の御宿は叶ふまじ
く候さりながら三日の間学
おそくまちまちまちて　男「是は
何とやらん心にかかり候　ワキ「御不審
もつともにて候さりながら世に寄持なる

手にかけめさるゝは唯某に御任せ
候へ 男「さらば頼み申さうずる
ワキ「扨藤栄殿乃在所はいづくにて候ぞ
男「あれに見えたるが藤栄殿の御館
にて候、今日は浦遊びとて出られ候よし
申候 ワキ「さらばそれに出て彼人を
あひ待ちて見うずるにて候、某は
頼みて候へ、月若殿をば同心にて候
頼みもあるまじく候 男「心得
申候 シテ幼「是は芦屋乃藤栄にて候
さても今日は天気よく候間浦遊びに
罷出候、誰かある トモ△「御前に候
シテ「浦遊びに出べく候、舟を用意し候へ
トモ△「畏って候 シテ「いかに舟の者あれに商

つゝく笛敷乃音はかのへつかれあれ
うちそておもて寄なくまゐりて候へ
是ては蝉丸にておはしますか
逆髪ぞやあれなる藁屋の内より
こ申作り汲蘇みつゝ物をと
あみゆくは思へくなは岸
乃やくひ狼乃御おもへはなをり

六

たゝよのためにもやくかへれ
君と我と我ときこと
まゝらせよめ候よりにてよかれ
思ひ寄の御出ならずは其よのは
志たはしき御逆髪の為に酒をおき
さて御門の白きもかゝる玩義
ましまさば法の御身はひとりにて

さればこそいかに船頭殿へ申候
某の舞をまへと仰候ふほどに
シテ 舩にては鞨鼓ばかりまはれ候
上 よし野立田乃花もみぢばかりかは
越路乃月雪 支舟乃あそびせし
それ舟の起りは 黄帝の御宇より
起りて 流れ貨狄がはかりことより
シテサシ 爰に又蚩尤といへる逆臣あり
亡さんとし給ふに烏江といふ海を隔
てゝせむべきやうもなかりしに 黄帝
乃臣下に貨狄といへる士卒ありけり
時貨狄庭上の池の面を見わたせば
折節秋の末なるに 吹嵐にさそはれて
にちる柳の一葉水上にうかびつゝ

蜘といふ虫是も虚空に落けるが其
一葉の上に乗りつゝ次第〳〵に
けいとをかけて柳の葉の吹来る汀
風にさそはれ汀によりし秋霧の
立くる蜘のふるまひを思ひそめ
しようたくみて船を作り黄
帝是にめされて烏江を漕わたり

て蚩尤をやすくほろぼし御代を治
め給ふ事一萬八千歳とかや然れ
ば舟の字をば公にわたすと書
たり又天子の御かほを龍顔と
名付奉り船の一葉といふも此江
字よりぞはじまりし君の御舟を龍
頭鷁舟と申も此御代よりおこれり

口と舞まする者の名字を成行と
いふぞ藤栄殿と申て隠なき人なり
こな藤栄が名の舞まで打まするは
今に上り〳〵まへ今のとこ それはたり
花様よ申候て 愚僧がつとこ人
是沙く候いつ戸にあまりさ候は者
乃藤栄殿の舞法面白き今一番

まひと申候て花様よりは御成沙汰
者の身がかりく御目う 候へはあまたう
て候 安宅関の舞をばらずまつよ
てある間しば八幡にとまりて者か
きうまするとと申候へ いやくくまし
かくぬよりとくは花様よ申て
候いとに申候とてよしで候

拝ミ奉れハ前に御まします向ハたち
もとハ此あたりの者なれと修行
思ひてうてとく行脚しらね
作り者に舞一さしとこそ申さるゝハ
つゝれ藤栄の為にハ面目にて候へ
てハきうせ打ちける事ハあまきれとも
狂ひよきやうの情ありよかさし撥笑

きれ捨へもとりの内へ見て来申ちくれ
叶はまし水より敷る波のもとを
ぢくよ打てハ岸をとゞろとうちつ
あ風雲もよみ鳴る神のとゞろくと
なる時ハ降くる雨ハきらくを乱と
小藤の竹もきれとくもハきらも作だ
うちうく比よハけり扇のき

宛まし人々は笠乃うらへ見え候手中はう
「是は是社鎌倉の西明寺殿ちよ（道崇）
見え来し給ふが藤栄行きて八ッら
ちよくうさぬそうてとこふば母ねらが
乃振舞りかわ行とて無所月若をれ
出合ひし賊数延出て屋門ときを
をすげ前代未聞乃曲事也我法国を

修行もれ月全く父の代にあるは
が横れ乃柱を所とられ政道をとほりんり
為也ぶつの月若あら不便やけ同
此ふう実名よふかるんお事共
こゝろをもげよいは家々吉日あれいば屋
乃庄七百餘町の所月若に知行さる
租さわりぶ藤栄かうすいば重科人

乃事きこしめしける婆羅痆斯をし
あしおかれたりしもよしく慈悲ハ
上より下迄あまさす恩みつく報ずれ
あきれバ世の執行それハ相違ある人
うらみぞよりて押領をせ縁と
し一家繁昌たるへしとがさるゝ
安堵をくだされバ寮寺の経をも御改

道ぞゆかしける此世に出ぬ前若の心
乃中天子をしあつむる事なり給
やうやく宅に立帰りく執行それ
みちをくしと無極唐子繁昌
一族乃栄花きそまる百姓も万
民ども皆卿恩にほこりけりける
御代こそめでたけれ

雷電

平サレ 比叡山延暦寺乃座主法性坊乃律師僧正なり扨も我天下乃御祈祷乃為百日の護摩を焼候今日満しまいく候程に王舎を立行きはやと存候

サレ 宵やふけゆくゝる

あらたなる數し日吉乃年ありて

掛てぞ頼む湖乃、浪よりくる汁の
所ぞ又名には比叡の山ぞかし
秋おもしろや月の隈なき名所の
やまの冨士とみる山法乃灯火も乃
うつる影ゆゑ恵心よりぞ人をきらさ
ね掛てひかれく智證や山王
但おもよ仏法東漸乃御寺なり

やかりそめの値遇をもおろかならん
我立杣に冥加あらせてとぞよれ
経論さらさらまことにおもひまつ
し中門乃戸ひらきをせきせきり
深更よのきい月ちかりを乃業乃
戸もすぎつゞきも稀さい人きも覚ゆなり
いかなる松乃風やらんのうかきれ

まゝやまお　吹きしほるかたもなき
や人のかゝるみちとて雪まよひ
あしもとふみもとめ　身の程も
きえはつるよりほかはなき
ほかにも雪や逢相のきぬぬ
やごろはてゝあへなき
はしのへの中よりおほ

山庵乃　戸ほそをたゝきゆるる
かゝる庭佐の逢相かなや山方へと
けに月乃　歎めつゝやすらひのうく
まことにあふ時なき中々思ひて
ひとひやれその埃もれし人の逢相
えしらでも　あひせ世よ嬉しき
みだれたる毎のならひせと

是を思ひのやくにたかし梅ちよはいつて
みちし黒髪たちよし所存ならば女子
吊上てはわかれゆかし甲く
は吊悪く成さて有りしも妹
我く夫婦ならはけは数中とく然
ちとよし被激いかし及ぶさにまつはあれ
おきしは貴きなる所弟の約切なる

亡し主従むつましきは親子なりちち
又ありし身をも三つひと云をかや中にも
去る人のこころかけ乃かさこ事は所ず
三世まで去る有し夫しや所なれば
陰州なるいそて少しならは幼からし甚
時なき父をかく母もなく行ぬし
身ね守ありけふ菅丞相公乃養子

親ミ乃妻子乃内よ於て月ごとハ
ろきし憐ミて給ひ大かたの親
こと也叔勧学か室よ入僧正か
頼ミもあり風月乃窓よ月を招ぎ
たるをあはれめ夏山ハ茂ミ繁き
うらをしあさきかよ筆乃すさミし
を枝きり窓乃いつもはさそ

きゆゑ父等か堪能よ人を修行させり
めしおろさいぬりもあそばし御
こころざし乃今よいたる一字千金なり
いそてうミし撫さい我し世ちゝの
ちはなけひくハ部して此後梵天帝
天乃御憐ミを蒙りぢる雷とな
アゝ内裏よさらひ入我いうかし

雲客を蹴ころすべし 其時僧正
をとられ給ふともかまへて御参りあるな
ワキ「綸宣旨ハありともかへさはや 一二度までハ
しまゐるまじ シテ「いや勅使度々に及ぶとき
あまねきこもしかたくて参り給ふな
ワキ「王土にすめる身なれハ勅使三度
に及ばゞいかでか参内申さ

シテ「げにそれハ時平相をかへ儀よかし
さり際のさうし ワキ下 かくぬかる
乃御前に柘榴を二手向置たるを
上音 おつとりかみくだき 妻戸に
くはつとはきかけ給へハ柘榴忽火焔と
なつてとほそにもえあがる
れ僧正取りあへず印を結ひて

まします洒水乃かんをむすんでぞ
むかひ乃守りを唱へ給へば火煙はきえて
又煙のうちに立かくれ菅相は猶も
去らんとし給ふ乃ゆくゑを去らずせ給ふ
依之僧正ハ紫宸殿に座し秘法を
顕さんとてさま／＼に香ハ念を唱
きれハ所をも黒雲を吹かくす闇

乃夜雲をとめる内裏殿に膝まで
めぐくとはや あまたの所を
事なかりき金とそ動しきら／＼とよ
みさゆや虚空に黒雲おほくなる
降り四方よりひらめき鳴つゝ内裏へ
乃君乃御前にて山もくずれ内裏
きこえしにはかのかりにて震動ひ

まめく鳴神の雷の姿は現じたり
ワキ「其時僧正ちつとも向ひてのたまふやう
卒土四海のうちは王土に非といふ事
なし況菅丞相きいのことは君恩を
蒙る臣下として恩外忠勤未
殊なりしまし給ふかとおもふか
まゝやあらおもや僧正よりたれを

忍ありし仕へは僧正なりけり急ぎ
まし我もうらみし雲宮に思召
去らき山くらまを小龍となり
つまくし黒雲ように乗るしは雲の
四方を鳴まわれは稲妻いかりの
電光さりにむかきやまかとよ
神かやうと見えたりけるにこそや

僧正乃ゐ給ふ所をもさらすなりかゝる
なりひゞきわたる音おそろし紫宸
殿にも僧正あり弘徽殿にも僧正
あなたこなたへ移り給へは清涼殿
にいらせらる清涼殿よりうつり
給へはまたこゝに梅壺乃内よ
りのあらはれ出給ひ遠く先へもあらひ

て我行ところ乃つゝし僧正ある
さて雷も祈あひく息絶え〳〵生れ
いまはひかへとおもひしかれくあまし
かゝりける有様の所に千志丙段君右
さみく給へはこまり乃つゆみをこ
あへまとあら海乃ちやうしをやうすゝんて
悦しちまゝゑやゆゝふ給へ関法秘

密厳法味に預り御門より天満大
自在天神と贈官を蒙り相よ下
されはいきてのうらみ死しての悦
これまでなりや嬉しやとて
黒雲に打乗て虚空にあから
せ給ひけり

右之本者観世太夫織部
以章句真本今亦新令改
版者也
寛政十一己未歳弥生
天保十一庚子歳孟春改正再板
皇都二條通御幸町西入町
山本長兵衛